

## 1868年から69年にかけてのCharles Dickens

— *The Uncommercial Traveller* の考察を通して —

篠 田 昭 夫

Akio SHINODA

英語教育講座

(平成17年 9 月 9 日受理)

*The Uncommercial Traveller*<sup>1)</sup> はタイトルと同名の語り手である無商旅人が一人称形式により繰り広げる随想録といってよいが、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は全37篇のエッセイ群を彼自身が経営と編集にあたって毎週刊行した*All the Year Round*<sup>2)</sup>に三回に分けて発表した。一回目が“First Series”として17篇を1860年1月28日から10月13日にかけて*AYR*に発表し、二回目は“Second Series”として12篇を1863年5月2日から10月24日にかけて発表した<sup>3)</sup>。更に“Third Series”として8篇を1868年から69年にかけて発表して、これで*UT*に収録されている全37篇が出揃うことになるが、“Third Series”のエッセイ群を以下掲載順にそのタイトルと日付を記すと次のようである(最初のローマ数字は37篇全体を通しての章数である)。

- ① X X X “The Ruffian” (October 10, 1868)
- ② X X X I “Aboard Ship” (December 5)
- ③ X X X II “A Small Star in the East” (December 19)
- ④ X X X III “A Little Dinner in an Hour” (January 2, 1869)
- ⑤ X X X IV “Mr. Barlow” (January 26)
- ⑥ X X X V “On an Amateur Beat” (February 27)
- ⑦ X X X VI “A Fly-leaf in a Life” (May 22)
- ⑧ X X X VII “A Plea for Total Abstinence” (June 5)

これから1868年から69年にかけてのディケンズとの関連をめぐって、上記のエッセイ群を対象とする分析と考察を行うこととしたい。

### 〔 I 〕

第36章“A Fly-leaf in a Life”の冒頭で無商旅人は医師からの「即刻休養」との勧告に従って、おのが営みを中断して休養をとらざるを得なかった状況についての記述を展開している。

... it so wore me out that I could not reply, with my usual cheerful confidence, upon myself to achieve the constantly recurring task, and began to feel (for the first time in my life) giddy, jarred, shaken, faint, uncertain of voice and sight and tread and touch, and dull of spirit. The medical advice I sought within a few hours, was given in two words: “instant rest.” Being accustomed to observe myself as curiously as if I were another man, and knowing the advice to meet my

only need, I instantly halted in the pursuit of which I speak, and rested. (353)<sup>4)</sup>

これは1868年10月6日から100回の予定でイギリス全土を巡演する自作の公開朗読会を敢行したが、72回目でディケンズは過労のため倒れてしまい、1869年4月22日プレストンで主治医であるベアド医師 (Francis Beard, 1814-93) の勧告により、遂に公演にピリオドを打たざるを得なくなった状況について、一ヶ月後に記述したものである。「自己を他人であるかのごとく入念に観察することに慣れていて」ので、冷静に医師の勧告に従って直ちに休養をとることにしたと叙述されているけれども、額面通りに受けとめることができるであろうか。一ヶ月という時間の経過があることと、無商旅人なる語り手の体験談として叙述を進める姿勢をとっているのが、他人の出来事であるかのように客観視し得た記述が可能となったことは充分に考えられることである。それは作家として長年展開してきた心的態度の根幹に直結する姿勢でもあることは指摘するまでもなく明らかである。ということは長年の習性として身に付いたペルソナの下に自己管理を徹底し得て、何とかディタッチメントを利かせた叙述を認めている、と指摘できるようにも思われるのである。

例えば公開朗読の巡演の中止を決断する直前の4月19日付のベアド医師宛の書簡を見てみよう。

Is it *possible* that anything in my medicine can have made me extremely giddy, extremely uncertain of my footing (especially on the left side) and extremely indisposed to raise my hands to my head? These symptoms made me very uncomfortable on Saturday night, and all yesterday<sup>5)</sup>.

薬を服用しても一向に緩和されない身体の不調、めまい、左足の不自由さ、手が頭まで上がらないこと、といった不調とそれに起因する気分の落ち込みをベアド医師に訴えているこの書簡から感受されるのは、衰えがどんどんと進み老化の一途を辿るおのが現状への悲痛な認識である。

1858年5月の姉キャサリン (Catherine Dickens, 1815-79) とディケンズが離婚した後も義兄と同居する道を選んだジョージナ・ホガース (Georgina Hogarth, 1827-1917) 宛に2日後 (4月21日) に出した書簡中にも、同工の心情が看取される。

My weakness and deadness are all *on the left side*, .... he [Francis Beard]

recognizes in the exact description I have given him, indisputable evidence of over work, which he would wish to treat immediately<sup>6)</sup>.

左半身が衰弱している上に麻痺していることと、ベアド医師から薬の作用ではなくて、明らかに働き過ぎから来る症状だと指摘された旨をジョージナに報告しているこの書簡からも、抑制を利かせようと努めている筆致をもってしても隠しきれない悲痛で暗然たる心情が浮き彫りになってくるように思われる。書簡中で事実を冷静に報告する心的態度に徹しようとするディケンズの強烈な自制力には感嘆の念を禁じ得ないけれども。それ故、一人称体による叙述で随想が進められているとはいえ、無商旅人という虚構の人物を通しての記述という体裁をとっている *UT*において、客観的に突き放したタッチによる表現を繰り広げることは、もの書きとして30年以上に及ぶ体験と修練を積み重ねてきたディケンズにとって、悩苦を伴うことは避けられないとしても、それほど至難の作業であったとは考えられない。

*UT*第36章に話を戻すと、「ケントの私の牧草地」 (“my Kentish meadow”) (355)で静養している無商旅人のもとに滑稽で愚劣を極めた内容の手紙が殺到したが、その中に未知の国教会の牧師から同封した自作の説教集と詩集の購入を求め、無商旅人に前非を悔い

改め反省を迫る手紙も含まれていた。

... I found from the information of a beneficed clergyman, of whom I never heard and whom I never saw, that I had not, as I rather supposed I had, lived a life of some reading, contemplation, and inquiry; that I had not studied, as I rather supposed I had, to inculcate some Christian lessons in books; that I had never tried, as I rather supposed I had, to turn a child or two tenderly towards the knowledge and love of our Saviour; that I had never had, as I rather supposed I had had, departed friends, or stood beside open graves; but that I had lived a life of “uninterrupted prosperity,” and that the way to turn it to account was to read these sermons and these poems, enclosed, and written and issued by my correspondent! (ibid.)

自著の購入を勧める手紙の中で読書と思索にふけったり、キリストの教えを子供に伝えたりなどしていないとか、作品中でその教義を展開していないという風に、自分の子供達に読ませるために *The Life of Our Lord* (1846) と題するキリスト伝を執筆し、キリストの教えを基調とする *A Christmas Carol* (1843) を皮切りとする25篇に及ぶクリスマス物の作品群を書き続けてきた無商旅人、即ちディケンズにとって、おのが生き方と姿勢を臆面もなく真っ向から否定するこの国教会牧師は如何ように思えたであろうか。心身共に衰弱してその回復に努めているところへ届いたこの手紙に腹立ちは当然として、暗澹たる情念に加えて、内容の余りの愚劣さに批判を通り越した一種突き放した諦観を覚えたのではないかと想像される。だからこそ、「他人事のごとく思えた」という平静を保つ筆致はこうした内面が投影されて形象化されたものである、といってよいように思われるのである。

上記の実例に代表される空疎で劣悪な反応の連続（中には遺産の相続権を主張する者まで出現した）(357)に、無商旅人は次のような心情を吐露することでこの第36章の結びとしている。

With this, and with a laugh at the rest that shall not be cynical, I turn the Fly-leaf, and go on again. (ibid.)

「冷笑と墮さぬ笑い」で全てを受け流して先へ進むと認めている筆致が、上述の他人の事のように冷静に淡々と対処しようとする無商旅人の姿勢に繋がる内面の動きであることは明白であろう。私利私欲を剥き出しにした世情の反応と距離を置きつつ余裕をもって接することを通して、無商旅人即ちディケンズの内面は安定と平衡状態を保持し得たといつてよいかも知れない。という風に叙述においては悠然と構えた態度を示しているディケンズの自作の公開朗読の巡演の実相はどんなものであったのであろうか。

1867年12月2日から68年4月20日まで75回に及ぶアメリカでの公開朗読の巡回公演を実施してから、僅か半年後の68年10月6日から100回の予定でイギリスを巡演する興行に踏み切ったディケンズが、72回目の公演で事実上のドクターストップにより中止せざるを得なかったことは既述の通りである。その最大の原因として考えられるのが *Sikes and Nancy*<sup>7)</sup> を演目の柱として導入したことであろう。*Oliver Twist* (1838-1841) の第45章から第50章までの同棲相手の娼婦ナンシーの裏切りを知って逆上した粗暴で強盗を生業とするビル・サイクス (Bill Sikes) が、彼女を撲殺した後追い詰められて宙吊りの死体となる場面までを圧縮して作成した3章構成の朗読用テキスト<sup>8)</sup>を使用して、ディケンズが初演を行ったのは1869年1月5日のことであった。これに先立ってディケンズは1868年11月14日に招待した100名ばかりの身内と知友や報道関係者を観衆とする試演を実施したが、

ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-89) とチャールズ・ケント (Charles Kent, 1823-1902) を除く身内と知友の殆どが *Sikes* の公演には反対の立場をとった。長男チャリー (Charles [Charley] Dickens, 1837-96), 長年の友人にして相談相手でもあったジョン・フォースター (John Forster, 1812-76) と公開朗読の実務担当者であったドルビー (George Dolby, died 1900) 等, 試演を見たほぼ全員が *Sikes* の圧倒的な迫真性は評価するとしても、ディケンズの心身に及ぼす巨大な負担を危惧して反対の意向を表明したのである。それに加えて、ディケンズの公開朗読は朗読と共に “Action” とか “Shudder” というディケンズ自身がテキストの欄外に書き添えたト書きから察知できるように、演技を交えながら繰り広げられる独り芝居と称すべきもので、当然のことながらディケンズにかかる負担は大きく、単なる朗読をはるかに凌ぐ消耗と疲労を伴うものであったことは指摘するまでもあるまい。それを知悉していたからこそ肉親も知友もこぞって反対したのであるが、ドルビーによるとディケンズにそれに耳を傾けようとする気持ちは最初から皆無であり、その関心のすべては *Sikes* の殺人の場面に対する観衆の反応振りに、つまり観衆と自分との関係がどうなるかという一点に向けられていた<sup>9)</sup> というのである。この当時のディケンズは *Our Mutual Friend* (1864-65) 以降長編の執筆から遠ざかり、1867年の *No Thoroughfare* を最後として、*AYR* にクリスマス増刊号を設けてクリスマスに因む作品を発表するというのも、他人の作品との共同製作に耐えられなくなってきたという理由<sup>10)</sup> で打ち切ってしまう、時折り *UT* などのエッセイ群を僅かに発表する程度で、作家としての活動は殆ど休眠状態にあった。従って自ずと公開朗読の公演にエネルギーの大半を傾注する軌跡を描くこととなったディケンズが、観衆との関係の構築に腐心する姿勢を示したのは当然の成り行きといってよい。公開朗読を盛り上げる決め手として、1863年以来念頭にあった *Sikes* の公演に踏み切ったのも当然の流れといってよいものである。おのが体調を考えると「愚かな行為であり、そして自殺行為にも等しいという認識」<sup>11)</sup> をディケンズが持っていたとしても、それを抹殺して公演を執行した以上は、周囲からの反対意見を無視する態度に彼が出たというのにもむべなるかなという感じである。事実 *Sikes* に対する反響は素晴らしく、批評家が口を揃えて「ディケンズの最高の公演だ」<sup>12)</sup> と絶賛し続けたという。だが1月5日からドクターストップにより停止した4月22日まで28回も *Sikes* を上演し続けたディケンズの意図には、観衆との繋がりを重視する姿勢という基本的枠組みは当然として、それ以外の側面も存しているように感受される。*Sikes* の公演後心拍数が50以上も跳ね上がり、10分間全く口が利けぬ状態でソファに横になり、その後よろよろと舞台へ次の朗読公演のために出ていくという疲労困憊しきった姿<sup>13)</sup> を呈しながら、その上演を持続させているだけに、一層そうした印象が深まるばかりである。

それでは、ディケンズは自殺行為にも等しいとの自覚を抱きながら、寿命を縮めるだけの *Sikes* の公演を何故に強行し続けたのであろうか。先述したごとく観衆の確かな手応えを得たいという願望が中核に存していたことは改めていうまでもないし、更にサイクスがナンシーを惨殺するこのシーンの持つ迫真性そのものにディケンズが虜となってしまっていた<sup>14)</sup> ことも指摘できるであろう。だが、それとともにこの時期のディケンズ自身の生の軌跡にその有力な要因が存していることも見落とす訳にはいかないのである。

1858年5月をもって妻キャサリンとの離婚に踏み切ったディケンズにとって、癒しをもたらす存在は肉親を超えて愛人エレン・ターナン (Ellen Ternan, 1839-1914) であった筈である。公開朗読の巡業を全的に断念した1869年4月22日の直前の20日のボルトンにおける公演中に、同行していたエレン・ターナンのみがディケンズの不調と視力の衰えに気

付き、それを彼に教えて指摘してくれた<sup>15)</sup>というエピソードも伝えられているけれども、1868年あたりから両者の関係は距離のある疎遠なものに転質してきた<sup>16)</sup>ように見受けられる。分裂した二世帯の家族を抱え、成長してきた子供達の教育費も増加の一途を辿り、そして何よりもエレン・ターナンの面倒も見なければいけないディケンズは、確実に安定した収入を確保する手段として自作の公開朗読の巡業に頼り、一万ポンドもの巨額の純益が期待できるアメリカを巡る75回の公演を1867年12月から1868年4月にかけて挙行了。この間母親ともども姉フランセス (Frances Ternan) を頼ってフィレンツェに滞在したエレンは日蔭の立場を止めるようにという姉の説得もあって、ディケンズへの感謝と衰えゆく健康への同情から完全な決別は避けるとしても、友人としての関係を志向する心的姿勢をとるようになった<sup>17)</sup>と想像される。巨額の収入を求めて本国を離れていた間に、かさむ出費の最大要因が心変わりを見せていたとは何とも皮肉な話ではある。1857年ディケンズが主宰する素人劇団から出演を依頼されたことで知り合って愛人となり、1862年秋の出産を含め1865年6月9日ディケンズ (や多分母親) と乗り合わせていた列車が引き起こした鉄橋からの転落事故に遭遇するまで、ディケンズが「母親ともどもフランスに住まわせて、隠密理に会いに行くという生活様式をとるようになっていた」<sup>18)</sup>という、文字通り忍従の生活を強いられてきたエレンが、自立を志向する心的態度をとるようになるのは不可避の流れであったかも知れない。実質は離婚であったとしても、周囲や世間への配慮から妻キャサリンと表面的には別居という体裁をとっていたディケンズが相手の立場では、エレン・ターナンにとって正妻の座は望むべくもなかったからである。金品のためなら何でもする軽佻浮薄とか依頼心ばかりが目立つタイプとは対蹠的な着実で自立心の強い女性であるだけに、その庇護と援助に感謝の念は抱きつつも、姉からの忠告を待つまでもなく囲われ者というおのが立場に次第に嫌悪の情を抱懐するようになり、ディケンズとの関係に隙間風が吹くようになったとしても驚くにはあたらない。彼女のかような態度に接すれば接する程ディケンズとしてもどうにも解決の仕様のないフラストレーションが募るばかりであり、そうした情念を一掃するためにサイクスがナンシーを惨殺する場面のパフォーマンスに狂的に打ち込んだ<sup>19)</sup>ように感じられてならない。と同時に、妻キャサリンへの不満というか苦々しい想念と、そしてエレン・ターナンへの家庭を崩壊したおのが行為への罪の意識と絡み合った情念を、ナンシーを打ちのめすサイクスに託すことで放射する手段となっていた<sup>20)</sup>ようにも解されるのである。

加えて、ケンブリッジ大学に進学していた六男ヘンリー (Henry Dickens, 1849-1933) を除くと、八男で末子のエドワード (Edward Dickens, 1852-1902) が職を得た羊牧場を僅か10日間で辞めてメルボルンへ戻ってしまった事の (17歳の息子をオーストラリアへ放り出したディケンズの行為も問題だが) 謝罪の書簡<sup>21)</sup>を認めざるを得なかった上に、五男シドニー (Sydney Dickens, 1847-72) が抱えていた負債の尻拭いをさせられる<sup>22)</sup>等、あいもかわらぬ不肖の息子達の振る舞いに心労を覚える事態も出来ていた。これに相次ぐ訃報が追い討ちをかけた。8歳下の弟フレデリック (Frederick Dickens, 1820-68) が、生前は兄に迷惑をかけることの連続だったとはいえ他界し<sup>23)</sup>、続いて1869年3月6日には40年来の友人テネント (James Tennent, 1804-69) が不帰の客となった<sup>24)</sup>。更に優れた舞台俳優にして親しい友人でもあるマクリーディ (William Charles Macready, 1793-1873) の娘であり、かつてディケンズが刊行した週刊雑誌 *Household Words* (1850-59) に詩を寄稿したこともあるキャサリン (Catherine Macready, 1834-69) の肺結核による夭折の報に接して、衝撃を受けるという経験<sup>25)</sup>もしたのである。こうした訃報に加えて、

チェルトナムの公開朗読会にディケンズの招待に応じて来場したマクリーディの衰えた姿に接して、悲嘆にくれるという痛切な体験<sup>26)</sup>もした。こうした心労と悲愁を惹起する要因が連続的に襲いかかってくる状況下で、ディケンズが自殺行為にも等しいとの自覚を振り切るようにして、*Sikes*の朗読とパフォーマンスに憑かれたように熱中したのも、抑えがたい衝動の発露としか形容の仕様がなない感じである。「マニャック」<sup>27)</sup>に継続して大きな反響を得た公開朗読巡業の影響が著作の方に反映されて、最期まで著作の新しい版がその前の版の売れ行きを凌ぎ、全ての作品の売れ行きも年毎に増加の一途を辿っていったのは明白な事実であり<sup>28)</sup>、目論見以上の収入が可能となったディケンズとしては、経済的不安からは解放されたのであった。その分確実に寿命を縮め死期を早めることはなかったけれども。かくして、ドクターストップにより自作の公開朗読巡業を中止する事態を迎えたディケンズは、ロンドンへ帰るとすぐに顧問弁護士のウーブリー (Frederic Ouvry, 1814-81) に連絡をとって遺言書の作成<sup>29)</sup>を依頼したことから、外見は従前通りの気力とヴァイタリティを取り戻したように見えても、その内面に死期が近づいている事実への予感と自覚が生まれていた<sup>30)</sup>ように看取されるのである。

これまでの説明を踏まえて *UT* に話しを戻すと、公開朗読の巡業を打ち切った時点から約一ヶ月後に認められている、冷静に医師の勧告に従って直ちに休養をとることにしたという第36章の記述は、夫として父親として、或いは愛人を抱えている男として、果たすべき全ての責任と義務を果たし終えて、後は死期の到来を待ちながら、諸々の想念と煩惱を超克し得て、もしくは超克を希求しつつ、諦念の境地に達し得た作家の心情が表白された箇所であると考察できるように思われるのである。

## 〔Ⅱ〕

作家、即ち無商旅人の内面世界が覚悟の高みに昇り得ていたとしても、人間界の様態に何らの変容が及んだ訳ではない。

Walking faster under my share of this public injury, I overturned a wretched little creature, who, clutching at the rags of a pair of trousers with one of its claws, and at its ragged hair with the other, pattered with bare feet over the muddy stones. I stopped to raise and succour this poor weeping wretch, and fifty like it, but of both sexes, were about me in a moment, begging, tumbling, fighting, clamouring, yelling, shivering in their nakedness and hunger. The piece of money I had put into the claw of the child I had overturned was clawed out of it, and was again clawed out of that wolfish gripe, and again out of that, and soon I had no notion in what part of the obscene scuffle in the mud, of rags and legs and arms and dirt, the money might be. In raising the child, I had drawn it aside out of the main thoroughfare, and this took place among some wooden hoardings and barriers and ruins of demolished buildings, hard by Temple Bar. (346)

これは“On an Amateur Beat”と題する第35章より引用した一節である。コヴェント・ガーデンのすぐ近くのウェリントン・ストリート・ノース11番地にある *AYR* の事務所から外に出て、ロンドンの一向に好転しない世上に心を痛めていた無商旅人は、「巡回」と称する散策の途中でボロ服をまとい裸足の幼児と鉢合わせをして転倒させてしまう。テンブル・バーの傍らの板囲いをした廃墟に倒した幼児を連れていき、その手にコインを握らせた途端に50名もの同類の餓鬼どもが出現して、コインの凄まじい奪い合いを繰り広げた

という。*A Christmas Carol* (1843) と *The Haunted Man* (1848) に登場する餓鬼どもを彷彿とさせる場面であるが、この両作品を執筆した時点から20年を経過しても何一つ変わらない状態が眼前で展開されている訳で、無商旅人たる作者の怒りと批判の表白は当然であるとして、その無力感と底なし沼に落ち込んだかのごとき心象風景が想像されるばかりで。そして、セント・ポール大聖堂が幻影のように映じたという。

After this, when I came to the Old Bailey and glanced up it towards Newgate, I found that the prison had an inconsistent look. There seemed to be some unlucky inconsistency in the atmosphere that day; for though the proportions of St. Paul's Cathedral are very beautiful, it had an air of being somewhat out of drawing, in my eyes. I felt as though the cross were too high up, and perched upon the intervening golden ball too far away. (347)

ニューゲイト監獄もそうだが美しい輪郭を描いて聳えるセント・ポール大聖堂が、孤児達を野放しにして全く顧みない、世界に冠たる大英帝国の首都ロンドンの現状に心痛している筆者には、とりわけ不釣り合いでそぐわない空中の楼閣のごとく映り、同工の心象風景が展開されている描写であることは論を俟たない。

次の叙述も同一の心情が投影されている。

Facing eastward, I left behind me Smithfield and Old Bailey,—fire and faggot, condemned hold, public hanging, whipping through the city at the cart-tail, pillory, branding-iron, and other beautiful ancestral landmarks, which rude hands have rooted up, without bringing the stars quite down upon us as yet,—and went my way upon my beat,... (ibid.)

嫌悪していた筈の公開絞首刑まで含めて8種類もの犯罪者の処罰や処刑方法を「美しい先祖からの文化財」と呼び、それを廃止した動きを「下品で荒々しい」と呼称するなど、筆者即ちディッケンズの神経は怒りと絶望と空無感が縋い交ぜになり、ささくれ立ち、虚無に激しく渦巻きながら流れ込んでいるように感受される。

そうした内的傾斜は“Mr. Barlow”<sup>31)</sup>と題する第34章の掉尾を飾る叙述をも色濃く覆っている。

Mr. Barlow's knowledge of my own pursuits I find to be so profound, that my own knowledge of them becomes as nothing. Mr. Barlow (disguised and bearing a feigned name, but detected by me) has occasionally taught me, in a sonorous voice, from end to end of a long dinner-table, trifles that I took the liberty of teaching him five-and-twenty years ago. My closing article of impeachment against Mr. Barlow is, that he goes to breakfast, goes out to dinner, goes out everywhere, high and low, and that he WILL preach to me, and that I CAN'T get rid of him. He makes of me a Promethean Tommy, bound; and he is the vulture that gorges itself upon the liver of my uninstructed mind. (343-44)

「異常に幼い時から良書の偉大な読書家であった」(“A GREAT reader of good fiction at an unusually early age”) (338)と本章の冒頭で強烈な自信を披瀝して、傑出した資質と天賦の才を発揮していたおのが幼少時に立ち塞がり暗影を落とした「バーロウ先生」のごとき愚か者は絶対に許せないと息巻く無商旅人が、現在に至るまで生きたまま晒し者にされて肝臓を大鷲に喰いちぎられたプロメテウスのごとく、バーロウ先生にその「無知」を責め立てられ教訓を浴びせられて、喰いものにされ圧倒されるだけの絶望的な状況下にあ

る事実を表白している箇所である。クリスマスにも出現されて聖なる雰囲気を台無しにされ(342), 追い討ちをかけるように何処にでも出現して教訓や説教を垂れるバーロウ先生とその同類に付きまといわれ続けて疲労困憊し、遂には絶望の淵に沈んでいくだけの筆者、即ちディケンズの姿が露呈されるばかりの状態が感受されるのである。作家の出身や教育程度から「無教養」と判断した識者や文化人などの教化してやるといわんばかりの言辞を浴びることの連続であったパーティや晚餐会で絶望的状况に陥り、芝居と音楽鑑賞の場にまで同類の人間の出現を嗅ぎとる、鬱病的とも自虐的とも受けとれる心象風景が浮き彫りにされるばかりである。

絶対禁酒主義を訴える行列を目撃した際の記述は次のようである。

I have observed that the aggregate procession was on the whole pleasant to see. I made use of that qualified expression with a direct meaning, which I will now explain. It involves the title of this paper, and a little fair trying of teetotalism by its own tests. There were many people on foot, and many people in vehicles of various kinds. The former were pleasant to see, and the latter were not pleasant to see; for the reason that I never, on any occasion or under any circumstances, have beheld heavier overloading of horses than in this public show. Unless the imposition of a great van laden with from ten to twenty people on a single horse be a moderate tasking of the poor creature, then the temperate use of horses was immoderate and cruel. From the smallest and lightest horse to the largest and heaviest, there were many instances in which the beast of burden was so shamefully overladen, that the Society for the Prevention of Cruelty to Animals have frequently interposed in less gross cases. (360-61)

これは *UT* の最終章である “A Plea for Total Abstinence” と題する第37章より引用した、絶対禁酒主義を訴える行列において歩いている参加者は別として、様々な型の馬車に10人も20人も乗り込んで一頭の馬に引かせるという残虐な行為を犯している参加者が目立ち、それに対する痛烈な批判とも皮肉ともとれる論陣を筆者が張っている箇所である。特に “the temperate use of horses was immoderate and cruel” という部分の皮肉とも批判ともとれるトーンの厳しさと激しさは凄まじいの一語につきる。と同時に、絶望とも諦めともとれるトーンも感受されるといってよい。これは1869年6月5日に *AYR* に発表されたもので、1870年6月9日に他界したことを考えると、そのほぼ一年前に筆者ディケンズが執筆した文章ということになり、絶望と諦念が投影されているのは無論のこと、更に死の影といったものに覆われているように看取されるのも避け難い理解といってもよいかも知れない。こうしたトーンは *AYR* の事務室の窓から見下ろしている筆者の眼前に繰り上げられる聖霊降臨節（5月16日以降の一週間）を祝賀するパレードの中に、死刑執行吏の参加を認めた叙述を通して深まる一方である。

At intervals, a gloom would fall on the passing members of the procession, for which I was at first unable to account. But this I discovered, after a little observation, to be occasioned by the coming on of the executioners,—the terrible official beings who were to make the speeches by-and-by,—who were distributed in open carriages at various points of the cavalcade. A dark cloud and a sensation of dampness, as from many wet blankets, invariably preceded the rolling on of the dreadful cars containing these headsmen; and I noticed that the wretched people

who closely followed them, and who were in a manner forced to contemplate their folded arms, complacent countenances, and threatening lips, were more overshadowed by the cloud and damp than those in front. (360)

キリスト復活に縁の深い祝祭行事に参加している死刑執行吏が暗く不吉な影を投げかけていることは誰もが感得する事象であろうが、何とも重苦しく冷え冷えとした筆致には末期の予兆に色濃く覆われている気配が看取され、死の大いなる影にすっぽりと包み込まれて息も絶え絶えの人間の手になる叙述としかいいようのない感じである。スピーチをするようにとの招待を受けてパレードに参加しただけのことで、死の象徴と見立てられた死刑執行吏にとっては腹立たしく迷惑な記述ではあるけれども。

かように迫り来る死の影を明確に感受しつつ、人間も社会も相も変わらぬ愚行を演じ続けている様態を見つめるディケンズの想念が、*The Battle of Life* (1846) に登場する「この世の全ては茶番だ」と言うのが口癖のジェドラー医師 (Dr. Anthony Jeddler) の屈託のない言葉の域に留まることは到底できず、怒りや批判を、そして諦念を包含しつつ、暗澹たる絶望へと傾斜する軌跡を描いていることはもう述べるまでもない。

### 〔Ⅲ〕

“A Small Star in the East”と題する第32章で娘が鉛毒症にひどく冒された家庭の惨状を描いた筆者に対し、彼女が勤めていた鉛工場から抗議の書簡が届き、それに対して「すすんで視察に出向き、誤解があれば喜んで訂正する」<sup>32)</sup>と返信を送った上で、ディケンズは当の鉛工場へ足を向けることとなる。その結果を認めた文章が第35章に出てくる。

But I made it out to be indubitable that the owners of these lead-mills honestly and sedulously try to reduce the dangers of the occupation to the lowest point.

(351-52)

工場を視察した結果として、入念できめ細かい施設と従業員への配慮に感心したとの記述が展開されていて、ディケンズとしても心とむ瞬間を持ち得たかも知れない。

そうとはいえ、筆者である無商旅人の想いは、結局どんなに配慮しても鉛毒症に冒され寝込んで労苦と貧困に喘ぐ人々の現出を防止することはできないので、健康であるかどうかは天運次第だと流れていく。

“The lead, sur. Sure 'tis the lead-mills, where the women gets took on at eighteen-pence a day, sur, when they makes application early enough, and is lucky and wanted; and 'tis lead-pisoned she is, sur, and some of them gets lead-pisoned soon, and some of them gets lead-pisoned later, and some, but not many, niver; and 'tis all according to the constitooshun, sur, and some constitooshuns is strong, and some is weak, and her constitooshun is lead-pisoned, bad as can be, sur; and her brain is coming out at her ear, and it hurts her dreadful; and that's what it is, and niver no more, and niver no less, sur.”(320-21)

これはロンドンの巷を「巡回」していた無商旅人が遭遇した家庭の、娘が重い鉛毒症で寝込んでいる状況を説明しているアイルランド人の母親の言葉を写し取った箇所であるが、悲惨極まりない状態を驚くほど静かに淡々と語るこの婦人の態度に、全的に賛意を表した叙述が展開されていることは指摘するまでもなく明らかである。「鉛毒症にかかるかどうかは体質の強さ次第だ」という彼女の言葉を受け入れることは、上述したごとくすべては天運により決定されるという、受け身的想念を抱懷している心的姿勢の証左に他ならない

のである。

無商旅人は同工の体験を別の家庭でもする。

“If my eldest son earns anything to-day, he'll bring it home. Then we shall have something to eat to-night, and may be able to do something towards the rent. If not, I don't know what's to come of it.”

“This is a sad state of things.”

“Yes, sir; it's a hard, hard life. Take care of the stairs as you go, sir,—they're broken,—and good day, sir!”

These people had a mortal dread of entering the workhouse, and received no out-of-door relief. (325-26)

餓死寸前の貧民達が心の底から忌避する救貧院と院外の救済制度への批判を忘れてはならないけれども、ここの主眼点が困窮のどん底にある家庭の主婦が上掲の母親と同じく、実に淡々とした穏やかな物腰で語っている姿への深い敬意の発露にあることは、もう述べる必要もあるまい。多少の美化もあるかも知れないが、威厳を感じさせる立派な態度であり、その分一向に改善されない社会制度や政治に向かう批判も激化の一途を辿ることとなる。と同時に、焦燥から絶望、そして空無感も募る一方であることも、述べるまでもあるまい。

#### 〔IV〕

ところで、第32章の“A Small Star in the East”なるタイトルが後半部分に登場してくる“East London Children's Hospital”(326)を指し示すものであることは明らかである。これはイースト・エンドの困窮家庭の児童救済のために1869年1月にヘックワース夫妻(Nathaniel and Sara Heckworth)がラトクリフに開いた病院であり、無商旅人が逍遙の途中で偶然出くわしたという設定になっている。37あるベッドの一つに寝ているラファエロ(Raffaello Santi, 1483-1520)が描く乳児にもひけをとらない、可愛い乳児(但し水頭症と気管支炎からの激痛に小さなうめき声をあげることで耐えている)に対し、この児童病院の話しを必ず世に伝えと、手を重ねながら無言の誓約をする場面が現出する。

When the utterance of that plaintive sound shook the little form, the gaze still remained unchanged. I felt as though the child implored me to tell the story of the little hospital in which it was sheltered to any gentle heart I could address. Laying my world-worn hand upon the little unmarked clasped hand at the chin, I gave it a silent promise that I would do so. (327)

開設者であるヘックワース夫妻の「勇気と自己犠牲」<sup>33)</sup>への感動の共振を覚えた乳児と無商旅人、即ちディケンズが一体となり得たシーンとってよいがその中で筆者の「穢れた」手と乳児の「無垢の」手との対比は印象的である。無商旅人が二ヶ月後に再訪した時<sup>34)</sup>には第35章の記述にあるように、この子がその余りにも短い生涯を閉じていただけに。

The Children's Hospital, to which I gave that name, is in full force. All its beds are occupied. There is a new face on the bed where my pretty baby lay, and that sweet little child is now at rest for ever. (349)

重い水頭症に冒されながら天使の笑顔を見せた幼子が再訪してみると、昇天して神に召されていた事実接した無商旅人の心中は察するに余りあるとしかいいようのない感である。

そして、叙述は第32章で紹介された(328)、この病院に住みついてプードルズ(Poodles)

と名付けられたプードル犬へと展開していく。

Poodles is anxious to make me known to a pretty little girl looking wonderfully healthy, who had had a leg taken off for a cancer of the knee. A difficult operation, Poodles intimates, wagging his tail on the counterpane, but perfectly successful, as you see, dear sir! The patient, patting Poodles, adds with a smile, “The leg was so much trouble to me, that I am glad it's gone.” I never saw anything in doggery finer than the deportment of Poodles, when another little girl opens her mouth to show a peculiar enlargement of the tongue. Poodles (at that time on a table, to be on a level with the occasion) looks at the tongue (with his own sympathetically out) so very gravely and knowingly, that I feel inclined to put my hand in my waistcoat-pocket, and gave him a guinea, wrapped in paper. (349-50)

膝を悪性腫瘍で切断した幼女に続き、舌が異常に肥大した幼女が紹介され、二人の傍らに付いて親身になって心配するとともに、力一杯激励もしているプードルズが存在が利いて、深刻な場面にコミカルさを伴う救いの光が射し込んでくる感じで、巧みといえば巧みな設定と描写が繰り返されているといえようか。こうした場面からは「ディケンズの中で、悲哀と絶望が笑い、機知、馬鹿馬鹿しさへの認識などと常に共存し、一つになって作動している」<sup>35)</sup>という指摘も十分に首肯できよう。

〔V〕

コミカルさと救いといった明の雰囲気といっても所詮は線香花火に過ぎず、この児童病院を取り巻く世界は重苦しく暗澹としている。

Both the lady and the gentleman are well acquainted, not only with the histories of the patients and their families, but with the characters and circumstances of great members of their neighbours: of these they keep a register. It is their common experience, that people, sinking down by inches into deeper and deeper poverty, will conceal it, even from them, if possible, unto the very last extremity. (329)

ヘックワース夫妻の乳幼児救済のためには両親はおろか近隣の家庭までも救済する必要性を痛感して、記録をとることで必要なデータを整理して頭に入れつつ、手を差しのべて救済を行おうとする超人的奮闘にもかかわらず、これらの家族が貧しさの極限へズルズルと落ちていくだけの現実をどうにも変えることができないというのが実情であると認められている。この若い外科医とその妻の救貧活動に対して無商旅人、即ちディケンズは当然のことながら礼讃を惜しまない。だが、それとともにこの夫妻の献身的努力をもってしても、どうにも抗し難い貧困や窮乏の底知れぬ巨大な圧力が存在する社会相にも言及せざるを得ないディケンズも他方には存在している。卓越した現実認識と社会観を作動させて、作家が実相を直視して的確に記述していると指摘できよう。と同時にもの書きの活動を通して、講演や社会事業への関与という活動を通して、生涯をかけて社会と人間の向上と改善に挺身したチャールズ・ディケンズの無力感や絶望感へと傾斜する諦念の影が、死の雰囲気と一体化する形で、叙述を包み込んでしまっているけれども。

(注)

1)以下 UTと略す。

2)以下AYRと略す。

3)“First Series”を対象とする考察に関しては拙著『魂の彷徨—ディケンズ文学の一面—』（溪水社、1998）の27頁-46頁を、“Second Series”を対象とする考察に関しては拙論「1863年のCharles Dickens—*Mrs. Lirriper's Lodgings*と*The Uncommercial Traveller*の考察を通して—」（『福岡教育大学紀要』第51号第1分冊、2002、9頁-21頁）を参照のこと。

4)UTからの引用は本文、頁数とも*The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*（The New Oxford Illustrated Dickens, Oxford University Press, 1964）による。

5)*The Letters of Charles Dickens*, vol. 12 1868-1870, ed. Graham Storey (Oxford: Clarendon Press, 2002), p. 336.

6)*Ibid.*, p. 339.

7)以下*Sikes*と略す。

8)The New Oxford Illustrated Dickensの*Oliver Twist*（Oxford University Press, 1978）で55頁（pp. 337-91）ある分量が、*Charles Dickens: The Public Readings*（ed. Philip Collins [Oxford: Clarendon Press, 1975]）に収録されている*Sikes and Nancy*では15頁（pp. 472-86）に圧縮されている。

9)*Charles Dickens: The Public Readings*, p. 466.

10)*The Letters of Charles Dickens*, p. 212.

11)Cf. “he knew that this effort had been foolish, maybe even suicidal...”  
（*Charles Dickens: The Public Readings*, p. 471）。

12)“Dickens's most remarkable platform feast”(ibid., p. 468).

13)*Ibid.*, p. 470.

14)Cf. Philip Collins, *Dickens and Crime* (London: Macmillan, 1965), p. 272.

15)Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990), p. 1042.

16)Jane Smiley, *Charles Dickens* (London: Phoenix, 2002), p. 198.

17)*Ibid.*, p. 202.

18)拙論「Charles Dickens: *Mrs. Lirriper's Legacy*—1864年のクリスマス作品—」（『福岡教育大学紀要』第52号第1分冊、2003）、33頁。

19)Peter Ackroyd, *Dickens: Public Life and Private Passion* (London: BBC, 2002), p. 150.

20)Raymond Fitzsimons, *Garish Lights: The Public Readings of Charles Dickens* (Philadelphia and New York: Lippincott, 1970), p. 173.

21)1869年5月18日付のG. W. Rusden宛の書簡を参照のこと（*The Letters of Charles Dickens*, pp. 355-56）。

22)1869年5月4日付のMessers Banton & Mackrell宛の書簡を参照のこと（*The Letters of Charles Dickens*, p. 349）。

23)1868年10月23日付のDr. James Howinson宛の書簡において、ディケンズはフレデリックを看取ってくれたハウインソン医師に深謝している（*The Letters of Charles Dickens*, p. 207）。

24)1869年3月8日付のMrs. Forster 宛の書簡中で、公開朗読の巡業で滞在していたマンチェスターの地元の新聞でテネントの急死を告げる記事を発見してショックを受けたことを、ディケンズは認めている（*The Letters of Charles Dickens*, p. 308）。

1868年から69年にかけての Charles Dickens  
—*The Uncommercial Traveller*の考察を通して—

- 25)1869年4月3日付のW. C. Macready宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, p. 323)。
- 26)1869年1月23日付(?)のフォースター宛の書簡で、ディケンズは“Alas! he is sadly infirm.”とマクリーディの衰えを慨嘆している (*The Letters of Charles Dickens*, p. 280)。もっともマクリーディの方がディケンズよりも3年長く生き延びたのではあるが。
- 27)“something almost maniacal”(Peter Ackroyd, *Dickens*, p. 1042).
- 28)Ibid., p. 1043.
- 29)遺言書が作成されたのは1869年5月2日である(Norman Page ed., *A Dickens Chronology* [Houndmills: Macmillan, 1988], p. 135)。
- 30)Peter Ackroyd, *Dickens*, p. 1045.
- 31)トマス・デイ(Thomas Day, 1748-89)が子供向けに書いた童話 *The History of Sandford and Merton* (3巻, 1783-89)の登場人物。本書は邪悪で富裕なトミー・マートン(Tommy Merton)と正直な農夫の息子ハリー・サンドフォード(Harry Sandford)とを対照させつつ、二人の師バーロウ先生による教訓を通してトミーが改心していくという、教訓臭の強い無味乾燥といってよい作品である。
- 32)1868年12月29日付のMessers Johnson & Sons宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, p. 261)。
- 33)“Their courage and sacrifice” (Alexander Welsh, *The City of Dickens* [Oxford: Clarendon Press, 1971], p. 14).
- 34)第32章“A Small Star in the East”が*AYR*に発表されたのが1868年12月19日であり、第35章“On an Amateur Beat”が発表されたのが1869年2月27日である。従って両者の間に約二ヶ月の推移があるので、初訪と再訪の間にも同様の時間の経過があると推定されるのである。
- 35)Jane Smiley, p. 204.